

想いは彼方へ

水甲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

退院してきた神北詩音

眠っている彼方を見つけて、彼女との出会いを思い出し、彼もまたスクールアイドル同好会に関わっていくのであった。

響き渡る雫のもうひとつの物語。

目次

01	眠れる少女との出逢い	1
02	お昼の一時	5
03	自分の気持ち	9
04	誘い	13
05	愛の囁きの練習	17
06	遙ちゃんの作戦	22
07	どこまでが清纯で、どこからが不 純か?	27
08	次の段階	31
09	二人で水着選び	36
10	彼方さんと遙ちゃん	41
11	看病	46

12	バレンタイン	50
13	ホワイトデー	55
最終話	想いは彼方へ	60

01 眠れる少女との出逢い

響side

生徒会室で作業をしていると、誰かが入ってきた。最初は姉さんかしずくが呼びに来たかと思っただけ、違った。

「久しぶりだな。詩音」

「うん、久しぶり」

神北詩音。僕と同じ試験生で、生徒会では僕と同じ雑用十選挙管理職についている。

「何だか色々とおったみたいだけど、スクールアイドル同好会に入ったんだって？」

「そうだけど、ああ、彼方さんと仲良かったよね」

「うん、まあ……………」

何だか歯切れが悪そうだな。もしかして……………

「付き合ってるの？」

「い、いや、付き合っていると云うか……………とりあえず今日は顔出しに来ただけだから、帰るよ」

詩音は生徒会室から出ていった。あの様子は……………

「まあ、いいか。そう言えば勧誘しておくかな」

詩音 s i d e

俺と彼方さんは彼氏彼女の関係じゃない。ただ仲の良い友人として……………

「友達で良いのかな……………」

考えるのは後でもいいか。今は…彼方さんを探さないと……………

多分寝ていると思って、思い当たる場所を探していると、中庭の芝生の所に彼方さんが寝ていた。

「彼方さん、起きて」

彼方さんに声をかけるが、起きる様子がない。なんと言うか最初に会ったときの事を思い出すな

試験生として、虹ヶ咲学園に入学したけど、流石に女子が多いから片身が狭い。もう一人の試験生は慣れているのかなんのか、特に気にしてない感じに思えるのは気のせい

か？

いや、気にしてるから基本的に生徒会室にいるのだろうけど……………

変なこと気にせず、今は人目のない場所でお昼でも食べないと……………

偶々見つけた芝生に座ると……………

「むにゃ……………」

変な声が聞こえ、辺りを見渡すと誰かの足が見えた。近づいてみるとそこには一人の女生徒が寝ていた。

ブロンドの髪に、可愛らしい見た目の女生徒。何でこんなところで寝ているのか疑問だけど、とりあえずスカートから見える太股が目のやり場に困る

「あ、あの、すみません。こんなところで寝ていたら風邪ひきますよ」

「ん〜あれ〜？ 貴方誰〜？」

「通りすがりの人です。何でこんなところで寝てるんですか？」

「暖かくって、ここ絶好のお昼寝スポットなの〜所で君は男の子なのに何でここに〜？
もしかして」

彼女はスマホを取り出して、何処かに電話を使用していた。いや、不審者扱いはやめてほしい

「試験生です。お願いですから、通報はしないでください」

「試験生………そう言えばそんな話を聞いたことがある」

危うく通報されるどころだった。とりあえず今はお昼を食べないと……

「お昼ご飯？」

「あげませんよ」

「大丈夫。ねえ、みんなと食べないの？」

「女子に囲まれて食べられるほど、肝は座ってないので」

「おおく男の子だもんね、恥ずかしいよね」

彼女は立ちあがり、何処かに行くのであった。なんと言うか変わった人だな………

「そうだった」

戻ってきた彼女。何だ？どうしたんだ？

「私、近江彼方。貴方は？」

「俺は神北詩音です」

「詩音くんだね。よろしくね」

これが彼方さんと俺との出会いだった。

02 お昼の一時

お昼休み、何となく昨日の場所に来てみた。別に彼方さんに会いたいかさそう言うわけではなく、誰かに言い訳するように心の中で思っていると、昨日みたいに誰かの足が見えた。

「また寝てる……彼方さん」

そつと近寄り、声をかけると彼方さんはすぐに起き出した。

「むにや、あれ？君は昨日の……」

「またここで寝てたんですか？」

「そう、最近は天気が良いからね、天気が悪いときは保健室で寝てるよ」

「そうなんですか」

「それで何か用事〜？」

彼方さんは首を傾げながら聞いてきた。用つて訳じやないのだけど

何を言うべきか悩んでいると、彼方さんは……

「そつかく一緒に食べる人がいないのか」

「そう言うわけじゃ……」

言い訳しようとしたけど、事実だからな……………もう一人の試験生と食べても良いけど、生徒会長と仲良さげで邪魔するのは悪いし……………

「そんなところですよ」

「そつかくじゃあ一緒に食べよ〜」

彼方さんはお弁当を広げ、俺も買ってきたパンを食べ始めた。

特別話すこともなく、ただただのんびりと食べるだけだった。

食べ終え、教室に戻ろうとすると、彼方さんが呼び止めてきた。

「明日も一緒に食べよ〜」

「良いですけど、俺と一緒に良いんですか？」

「うん、詩音くんが寂しくないようにね〜」

なんと言うか面倒見のいい人だな……………

「それと何処にいるか分かるように〜」

彼方さんは携帯を取り出し、何をしようとしてるのか理解し、連絡先を交換するのであった。

それから一緒に食べることになってから、一週間が過ぎたある日の事

「何だか最近、仲がいい人ができたみたいだな」

生徒会室で作業をしていると、響がそんなことを言ってきた。何か噂になってるのか？

「まあ、三年生の人と………噂になってるのか？」

「うん、まあ、試験生だから目立つからな」

目立つのはしようがないけど、悪い噂だったら、彼方さんに迷惑かけるよな。

「悪い噂とかは？」

「ないみたいだな。まあ、良いんじゃないのか？先生達も馴染んでないかって心配はしてたし………」

「そう言う響は？」

「僕は………特には」

響は仲がいい女友達とかいないみたいだ。きっかけでもあればいいのだけど
……………

響の事を考えつつ、帰り道を歩いていると、誰かに声をかけられた。

「あの」

「はい?」

振り向くと可愛らしい見た目の女の子がいた。何処と無く誰かになてゐる気が
.....

「えつと.....?」

「神北詩音くんですよ。私、近江彼方の妹の遥って言います。少しお話いいですか?」

03 自分の気持ち

彼方さんの妹の遙ちゃんに連れられ、近江家にやって来た俺。

遙ちゃんはお茶を出しながら、話し出した。

「実はお姉ちゃんが貴方の話をよくするです」

「そうなの？」

「はい、詩音くんのご飯食べてたら〜とか、今日は詩音くんとかなど」

彼方さん、どんだけ俺の話をしてるんだよ。

「最初はお姉ちゃんに男友達が出来たと思っただんですが、話を聞いているうちに

……………彼氏ではないかと」

変な勘違いをし始めたぞ。この子……………別に彼氏じゃ……………

「いや、彼氏じゃないから。遙ちゃんの勘違いだよ」

「そうなんですか？でもお似合いかと思えますよ。詩音さん、優しそうですし、お姉ちゃん

を傷つけたりしなさそうですし……………」

この子は……………なんと言うか……………別に彼方さんに対して恋愛感情は……………

彼方さんの事を考えていると顔が熱くなってきた。それに胸がドキドキしてきた

「どうかしたんですか？」

「い、いや、別に……………」

「もしかして今になって意識したんですか？それなら応援します!!」

何だか遙ちゃんに応援された。

次の日のお昼休み。今日は天気が悪いため、保健室で彼方さんと過ごすことになった
「聞いたよ、昨日家に来たって」

「遙ちゃんに誘われて……………いい子ですね。遙ちゃん」

「自慢の妹ですから、でも遙ちゃんを傷つけたりしたら怒るよ」

「そんなことする人に見えますか？」

「ううん、見えないよ。でも念のため、もしも詩音くんが遙ちゃんと付き合ったら

……………弟になるのか」

何でそう言う方向にもって来たがるんだよ。

「俺は遙ちゃんと呼き合う気はないです」

「むう、遙ちゃんに魅了がないの？」

「そう言うわけじゃなくて、俺は彼方さんの……………」

「えっ？」

今、何を言おうとしたんだ？俺は……………彼方さんは顔を赤らめている。このまま伝えていいのか？でも……………

「えっと……………そろそろ授業が始まりますよ。行きましょう」

「う、うん」

何とか誤魔化すことに成功したけど、ちゃんと自分の気持ちに向き合わないといけな
いよな

放課後になり、自分の気持ちを考えた。俺は彼方さんの事は好きでいいのか？

ただ偶然知り合って、そう日が経ってないのにな？

「……………」

ため息をつきつつ、歩き出すと、何かの音が聞こえた。

「えっ?」

まさか自転車に引かれるなんて………命に別状はなかったけど、体を強く打って、暫く入院することになった。

そして現在、彼方さんに声をかけ続けて

「んあ、あれ〜詩音くん、久しぶり〜」

目を擦り、俺の姿を見て、抱きついてきた。人目がないからって、誰かに見られる可能性があるんだけど、それにいろいろ当たってるし

「急に会わなくなつたから、嫌われたかと思つたよ〜」

「別に嫌いになる理由はないですよ。ただ………」

「聞いたよ〜入院してたんだよね〜お見舞いに行けば良かったよ〜」

「すみません」

「それじゃ、改めておかえり」

「はい、ただいま」

04 誘い

退院してから数日後

彼方さんにあるお願いをされていた。

「同好会に？」

「そうく詩音くんどうかなくてく」

同好会って、響と同じ様にサポートしてほしいと言うことかな？でも……

「やめておくよ。生徒会の仕事で手一杯だし」

「そうなのく？でも響くんは両立してるよく」

「あいつはどつちの仕事もしっかり終わらせたりしてるから、俺には無理だよ」

断ると彼方さんは頬を少し膨らませ、ちよつと不満そうにしていた。何と言うか可愛

らしい……

と言うか何か色々気持ち溢れてきた。ちゃんと伝えるべき時に伝えないといけないから、我慢しないと………

彼方さんにある相談を持ちかけられた僕。その相談内容は……………

「同好会に入れたらいいって……………」

「そうなの？響くんなら何かいい方法思い付かない？」

彼方さんは詩音の事を気に入ってるな……………

「まあ、あいつの言う通りだと思いますよ。生徒会の仕事は基本的に忙しいですし、せつ菜も何とか終わらせて、同好会に参加してる感じですからね」

「響くんは？」

「合間合間に終わらせてるので」

休み時間とかに少しずつ終わらせてる。たまにしづくが手伝っているし……………

「そっか？同好会に誘うのは無理か？」

ちよつと残念そうにしている彼方さん。何かいい方法がないか考えていると、ある方法を思い付いた。

僕は彼方さんにそれを伝えるのであった。

次の日の放課後、帰ろうとしていると響からメッセージが入った。

『彼方さん、まだ練習に來ないから連れてきてもらえないか?』

何で俺なのかと思つたが、特にやることはないし、思い当たる場所に行くと、彼方さんが保健室で眠っていた。

「彼方さん、起きてください。練習始まりますよ」

「むにゃ〜おはよ〜詩音くん〜」

「起きましたね。それじゃ俺はこれで……………」

「ん〜部室まで送っていつて〜」

目を擦りながら言う彼方さん。送っていつて……………どうやつて……

「おんぶ〜」

おんぶしろと……………断る気になれないし、俺は彼方さんをおんぶした。胸やら太腿やらの感触を気にせず、同好会に向かうのであつた。

部室に着くと出迎えてくれたのは、響の姉、友里さんだつた

「彼方さんを連れてきてもらつてありがとう。詩音くんね」

「は、は〜」

俺は彼方さんを下ろし、帰ろうとすると友里さんがあることを言い出した。

「詩音くん、お願いがあるんだけど、彼方さんのマネージャーになつてくれない？」

「マネージャーつて、同好会に入るつもりはないですよ」

「知ってるわよ。マネージャーつて言つても、彼方さんをここに連れてきて貰えたりしてもらっただけでも良いの。詩音くん、彼方さんを起こすの得意みたいだしね。ね、いいでしょ」

この先輩、押しが強くないか？断つてもいいけど、納得してくれなそうだし……………
「暇なときならいいですよ」

「ありがとうくそれじゃよろしくね」

何と言うかこんな姉を持って、響は大変だな……………

05 愛の囁きの練習

「俺はどうすればいいと思う?」

「いきなり呼び出して、何の相談ですか?」

彼方さんへの思いに関して、俺はどうすればいいのか遙ちゃんに相談をしていた。

遙ちゃんは話を聞いて、あきれた顔をしていた。

「それでしたら、早いところ告白してください。きつとお姉ちゃんならokしますよ」

そうは言うけど、実際問題、告白するとしても恥ずかしい。

「どうにかして恥ずかしくならずに告白出来ないか………」

「男の人って面倒ですね〜それでしたら、慣れるのはどうでしょうか?」

「慣れる?」

遙ちゃんの提案は彼方さんが寝ているときに、告白の練習を試みればいいのかと言うことだった

それは流石にバレるんじゃないかと言われたが、寝ているから大丈夫だと言われた。放課後、寝ている彼方さんに試しにやってみることにした。

「彼方さん、好きです」

「くう〜」

寝ているから反応はない。と言うか言葉にするだけでも恥ずかしい。

遙ちゃん曰く慣れるまでやってみてほしいけど、これ誰かに聞かれたりしてないよな。

「ねえあれって彼方のマネージャーの……………」

「うん、詩音くんだよね」

「いやあく寝てる時にあんな風に愛を囁くなんて……………」

「あれで付き合っていないみたいですよ」

果林さん、エマさん、愛さんと一緒に部室に向かう途中、詩音が彼方さんに愛を囁いている場面に遭遇した僕ら。もう少し人目を気にして欲しいのだけど……………」

「と言うかもし起きていた時とかの事を考えているのかしら?」

「さあ？」

まあ、変に茶々入れずにその場から立ち去る僕らであった。

練習から数日が過ぎ、今日も練習をすることになった俺。だが今までとは違う言葉で練習するようにと言われた。

『好きですだけじゃ駄目です。ちゃんとどんなところが好きなのか言ってください』

とのことなので……………

「彼方さん、俺は彼方さんの事が好きです。一目惚れかもしれないですけど、意識をするようになって、貴方のちよつとした仕草、優しさに触れていって、貴方への思いが強くなつて来ています」

うん、かなり恥ずかしい。わざわざ言わなくてもいいだろ。

またまた目撃してしまった。詩音の愛を囁く時間。

今回は莉奈、かすみの二人とだ

「弟さん、あの二人は付き合っていないんですよね」

「それにしては見てられない。莉奈ちゃんボード『うっとり』」

「と言うか誰の入れ知恵だ？ 詩音があんなことを自分からやるのはおかしい」

考えられるのは姉さんか？ でも姉さんがあんなことをさせる事は思い付かない。

姉さんは人の恋愛に対しては少しのお節介をして、後は応援のみだ。だとすると

.....

会ったときがないけど、彼方さんの妹が入れ知恵をしたのか？

「とりあえず変にからかわないで、放っておこうか」

後は成り行きに任せることにしたのだった。

また数日後、遙ちゃんの指示は、後はもう『大好き』と言うことだけだ。

何でここに来て直球なのか気になるけど.....

「彼方さん、大好きです」

練習のお陰である程度なれては来ているけど、未だに恥ずかしい。

すると遙ちゃんからメッセージが入った。

『いい忘れましたが、耳元で囁いてください』

何処かで見えないよね？

とりあえず言われた通りにしてみよう。

「彼方さん、大好きです」

これはこれで恥ずかしいな……………と言うかこれをまだ続けないと行けないのか？

「……………私も〜」

不意に彼方さんの声が聞こえた。最初は寝言かと思っただけど、彼方さんの目は開いている。

「私も詩音くんの事が好きだよ〜」

06 遥ちゃんの作戦

「お姉ちゃん、もし詩音さんに寝ているときに声をかけられたら、寝た振りして」

私はお姉ちゃんにそんなことを伝えた。お姉ちゃんは不思議そうな顔をしていた。

「詩音くん、迎えに来てもらったりしてから、寝た振りはちよつと」

「いいから、きつと良いことがあるから」

「うくん、わかつた」

とりあえず納得するお姉ちゃん。さて明日が楽しみだな

次の日の夜

「ねえ、遥ちゃん」

「どうかしたの？お姉ちゃん？」

「言われた通り寝た振りしてたら、詩音くん」

「詩音さんに？」

「ううん、何でもない」

言いかけるお姉ちゃん。これはいい感じかもしれない。後少ししたら……今度は

それから数日後

お姉ちゃんが顔真っ赤にしている。やはり効果は抜群だ。さてそろそろお姉ちゃんには答えてあげるように言わないと

「ねえ遙ちゃん」

「何？お姉ちゃん？」

「答えた方がいいかな？」

私が言わなくても良さそうみただけど、ここは……………

「答えて？」

「詩音くんが寝てる私に好きって言うてくるの」

「うんうん」

「遙ちゃん、驚かないの」

「驚いてるよ、私から言えることは答えてあげて」

「そうした方がいいよね」

さて明日辺りが楽しみだな

「えっと、彼方さん？」

「私も詩音くんの事好きだよ」

「も、もしかしてさっきの……………」

彼方さんは首を横に振った。

まさかと思うけど……………」

「詩音くんが寝てる私に好きって言うてきたときから聞いてたよ詩音くん、私の事好きだったんだね」

全部聞かれてたのか……………ここは変に誤魔化さずに……………」

「はい、俺は彼方さんの事が好きです。俺と付き合ってください」

「うん、いいよでも私の事だけじゃなく、遙ちゃんの事も好きになってね」

何で遙ちゃんの事も？

「私は詩音くんと遙ちゃんが同じくらい好きだから、貴方も……………」

妹思いだな……………でも彼方さんがそうしてほしいなら……………」

「分かりました。彼方さん」

「えへへ嬉しいなく折角だから……………えいつ」

彼方さんが抱きつき、そのまま倒れこんだ。何か色々柔らかい。というか何とか理性を保たないと……………

「あたたか〜い。このまま一緒にお昼寝しよ〜」

「いや、それは……………」

無理矢理引き剥がすのも悪い気がする。ここは諦めて一緒にお昼寝するしかないけど……………

彼方さんの顔が近いし、匂いもいい匂いで……………

自分との戦いになりそうだよこれ……………

「二人、あんなにくつついて……………寝てるなんて……………あんなの……………」

「わ、私と響くんもあんな風に寝ましたよ」

「そうなの？響くん」

「しずく、バラすなよ……………」

「二人の仲がよくなってよかったわ」

せつ菜は顔を赤らめながら見つめ、しずくは前に泊まったときの事をばらして、歩夢お姉ちゃんに驚かれ、姉さんはニコニコしていた。

二人が遅いから迎えに行ったら、まさかの場面を目撃してしまった。
せつ菜は注意するべきか悩んでいるけど、放っておくことにしよう

07 どこまでが清纯で、どこからが不純か？

彼方さんと付き合うことになったのはいいけど……………

「くく」

「彼方さん、起きてください」

この抱き締めながら寝られるのはどうにか出来ないものか……………
顔も近いし、色々と感触が……………

「彼方さん、起きてください」

もう一度声をかけると、ようやく彼方さんは起き出した。

「んくおはようく詩音くん」

「人を抱き枕にするの止めてください」

「詩音くんく抱き心地がいいからく」

また抱きついてくる彼方さん。俺はすぐに引き剥がした。

「……………嫌だったく？」

「嫌……………じゃないですけど、俺は男の子ですよ」

「うん、知ってるよ」

「そうやって抱きつかれたりされると……………」

俺が言いたいことをすぐに理解したのか、彼方さんは顔を赤らめた。

「こ、恋人同士はそうするものだと思っただのに」

「まだ付き合いはじめて、一時間しか経ってませんよ」

「でもしずくちゃんと響くんは付き合う前から抱き締めあつたって」

あの二人は……………

「それに一緒に寝たって言ってたよ、それにキスもたくさんしてるって、恋人同士ならそれが当たり前だって」

生徒会室

「響!!お前!!」

急いで響がいる生徒会実に向い、叫んだ。

「何だよ? ああ、練習なら早めに終わらせたからって連絡し忘れてたことか?」

「そうじゃなくって、彼方さんにお前らの惚気話を聞かせるなよ」

あれは本気で言っていた。僕としては色々段階を上げてからじゃないと…………

「いや、詩音、お前も大概だからな、耳元で愛を囁くのか」

こいつ、聞いていたのか？と尋うか見られて当然なだけ……

「因みに同好会のみんなに目撃されてるからな」

「か、隠れてやればよかつた……」

「まあ、彼方さんに勘違いさせたのは悪かつたけど、これからはちゃんとした方がいいんじゃないのか？ほら、あそこで睨んでる奴がいるし」

響が指を指した方を見ると、そこには三船さんが睨んでいた

「お二人とも、試験生ですよ。不純な異性交遊は……」

「不純なつて例えば？」

「た、例えば……それは……その……」

「三船的にはどこまでが清純で、どこからが不純なんだ？」

三船さんが、狼狽えていた。あんまりいじめるのはやめた方が……

「響、いじめは駄目だよ」

「いや、三船はからかいやすくて……つい」

響は三船さんの事が嫌いって訳じゃないけど、何故かからかう。何でかは知らないけど……

「全くあなた方といると……」

「因みに三船が恋人ができたとして、最初にして欲しいことは？」

「……答えないと駄目ですか？」

「俺としては参考までに……」

「……………」

「ん？」

「手も繋いで欲しいです……」

案外純情だ。

「と、とりあえず二人は試験生であり、生徒会ですから、不純なことは駄目ですからね」

そう言って出ていく三船さん。

「とりあえずゆっくりに付き合っていくんだな」

「わかったよ」

08 次の段階

「次はキスですね」

遙ちゃんから呼び出され、いきなり言われたのは、そんなことだった。

「あのさ、何でそんな話になるの？」

「現状詩音さんとお姉ちゃんの進み具合は手を繋いだりは一緒に寝るくらいです」

「一緒に寝たって言うのはちよつと色々と問題があると思うけど……………」

性的な意味合いではなく、普通にお昼寝したくらいだから……………」

「手を繋いだのはお姉ちゃんから感想込みで聞きました。凄く暖かくって、それでいて頼もしかったと、それでいて、凄くドキドキしたと……………」

彼方さん、お願いだから遙ちゃんに感想を言うのは止めてください。こつちまで恥ずかしい……………」

「だとすれば次はキスですね。デートでもなんでも誘ってしてください」

「いや、デートとかキスとか、俺の心の準備が……………」

「言い訳は結構!!お姉ちゃんが幸せになれば、私も幸せになりますので……………デートじゃなくても、キスだけでも」

遙ちゃんにキスをせがまれつつ、俺は帰るのであった

「はあ」

彼方さんと一緒にお昼を食べる中、俺はため息をついた。

彼方さんはそんな俺をみて、心配そうにしていた。

「どうかしたの〜ため息なんてついて〜」

「いや、色々と……………」

遙ちゃんはあることを言っていたけど、キスなんてすぐ出来るものじゃない。しなかつたらしなかつたで、何かしら言われるかも知れないけど、ここは自分のタイミングで……………

すると彼方さんは、欠伸をした。

「少しお昼寝しよ〜」

「駄目です。すぐに授業が始まりますから」

「少しだけ〜」

「俺は帰るので寝ませんからね」

「ぶくわかった〜」

彼方さんはそのまま寝るのであったが、何故か俺の膝を枕にした。

「あの、彼方さん……」

「ごっごっしてるけど、詩音くんのだからいい感じ〜」

そのまま寝入る彼方さん。とりあえずこのままの方がいいと思い、時間まで寝かせるのであった。

授業が始まる10分前、そろそろ起こそうと思い、声をかけた

「彼方さん、起きてください」

「むにゃ」

あれ？前は一回で起きたのに今日は……………

「キスしてくれないと起きれない〜」

キスをしないと起きないって……………これは遥ちゃんの入れ知恵か？だとしたら……………

「彼方さん……」

このままするべきなのか？でもこんな感じでキスなんて……………

俺は彼方さんにチョップを喰らわせた

「いた〜い〜」

「起きてください。遅れますよ」

「むう〜」

俺は怒る彼方さんを見無視し、教室に向かうのであった。

放課後

彼方さんと一緒に帰るのだが、全然会話がなかった。お昼の事が原因なのかもしれない。

「……………」

「……………」

空気が重い。このまま何も話さず終わるのかな？だとしたら……………

「彼方さん……………」

「何？」

俺は彼方さんの腕を抑え、そのままキスをした。

「ごめん。タイミングとか考えていて、お昼の時に拒否して……………」

「……………かい」

「彼方さん？」

「もう一回して」

そう言つて目を閉じる彼方さん。俺はもう一度キスをした。今度は長めに……

唇を離すと彼方さんはその場に座り込んだ

「キスつて……………こんな気持ちいいんだね〜腰が抜けちゃった」

顔を赤らめながらそう言う彼方さん。

「彼方さん、たてますか？」

「ちよつと無理そう〜おんぶして〜」

俺は彼方さんを背負い、家まで送るのであった。

「私とキスしたくないのかなって思ったの〜でも詩音くんは純情なんだね〜」

「こういうのはちゃんとしたので……………」

「エツチなことは？」

「今は考えたくないと言うか……………と言うかそう言うことはこんなところで言わないでください」

「えへへ〜」

09 二人で水着選び

ある日の休日

俺は駅前で待ち合わせをしていた。待ち合わせの相手は勿論……

「お待たせ〜」

彼方さんだ。彼方さんの私服は始めてみるけど……

「あの、着崩れしてますよ。その……直した方が……」

肩だけでもすぐく目に悪いというか……

「そう〜?でも詩音くんがそうした方がいって言うなら〜」

そう言つて直す彼方さん。さて今日の目的を果たさないと……

「それじゃその……」

「ん〜まだ緊張してるの〜?気にしなくていいのに〜」

そう言いながら腕を組んでくる彼方さん。とりあえず目的の場所に行かないと

……

今日の目的地である彼方さんの家。何でわざわざ待ち合わせをしたのかは、恋人らしいことをしたいとのことからだ。

そして今日ここに来たのは……………

「どう〜?」

部屋に入ってきた彼方さんの姿はビキニ姿だった。今日の目的は彼方さんの水着選
びだ。

「似合いますけど……………そのわざわざ見せなくつても……………」

「だって貴方を選んでほしいから〜」

そう言うけど、目のやり場に困る。彼方さんはスタイルがいいし、胸もあるから

……………

「紐とかだと、ほどけたりしたら大変ですよ」

「その時は詩音くんにくつついてるから大丈夫〜」

平気でそんなことは言うようになったのはいいけど、俺が色々と大変なんだが

……………

「とりあえず次……………」

「うん〜」

次の水着に着替える彼方さん。というかこう言うときに何で遙ちゃんがいらないんだよ。遙ちゃんが選んだやつならって言いそうなのに、

「お待たせ〜」

次の水着はワンピースタイプの奴だ。これはこれでいい。

「似合ってますよ」

「えへへ〜ありがとう〜」

「それじゃその日の水着に決ま……………」

「次のに着替えるね〜」

「まだ着替えるんですか？と云うか何の水着に……………」

「お待たせ〜」

彼方さんが着替えてきたのは、スクール水着だった。サイズが合っていないのか色々ときつそうだ。

「つて何でスクール水着?!」

「ええ〜だってこの方が男の子は喜ぶつて〜」

「誰だ?遙ちゃんか?実の姉になんて格好を……………」

「響くんが〜」

あの野郎……………」

俺は彼方さんの肩をつかみ

「彼方さん、そういうのは一部の男子が喜びますが、俺としてはもつと普通の……………」

「うくん、だめ〜」

「駄目です」

「むう〜詩音くんが言うなら〜」

納得し、着替えにいく彼方さん。というか後で響を問い詰めないと……………

すると何か破ける音が聞こえ、振り向くと、彼方さんが着ていたスクール水着の脇腹のところが破けていた

「ちよ!?!」

「うくん、昔の奴だから破けちやた〜」

「早くきがえてください……………」

「……………」

ある視線に気がつき、振り向くと遥ちゃんが見つけていた。そしてすぐにスマホをとり出し……………

「もしもし友里さん。あの今日泊めてもらえないでしょうか？お姉ちゃんと詩音くんがやらしいことを……………」

頼むから説明させてほしい

その後、何とか事情を話、納得した遙ちゃん。水着は結局遙ちゃんが選んだものになったのだった。

10 彼方さんと遙ちゃん

「はあ〜」

さつきから彼方さんがため息をついている。どうかしたのかな？もしかして悩み事でもあるのかな？

「あの、彼方さん。どうかしたんですか？さつきからため息をついて」

「詩音く〜ん〜あのね〜実は〜遙ちゃんが……………」

遙ちゃん？もしかして……………

「喧嘩でもしました？」

「ううん、いつも仲良しだよ〜なのに……………今朝」

「今朝？」

「お弁当受け取ってくれなかったの〜」

……………普通ならそんなことだと思うところなのだけど、彼方さんと遙ちゃんの仲の良さを……………特に彼方さんの遙ちゃんラブを知っていれば、この案件はかなり重大だ。

「機嫌が悪かったとか？」

「ううん、昨日の夜は普通だったよ。今朝も変わった様子もなかったし………遙ちゃんに嫌われたら私、生きていけないよ」

落ち込む彼方さん。どうしたものか………

「あの俺の方で話を聞いてみるよ」

「でも詩音くん、忙しいんじゃない………」

「彼方さんが死んだりしたら、俺が今度生きていけなくなりますから」

生徒会の仕事もきつと響が何とかしてくれるから大丈夫だ。

「ありがとう。詩音くん。大好き」

放課後、遙ちゃんを呼び出し、話を聞いてみた。

「えっ？お弁当の事ですか？」

「うん、彼方さん、凄く落ち込んでいて、嫌われちゃたかなって」

「嫌いになんかなってませんよ。ただ」

「ただ？」

「この間のイベントのお姉ちゃん、凄く輝いていて、元気いっぱいもらったんです。それ

で思ってたんです。私、お姉ちゃんに甘えていて、お姉ちゃんがしたいこと我慢してるんじゃないかって……………」

そんな事はないと思う。付き合つて分かったことがある。それは彼方さんのしたいことは……………」

「そんなことないよ。彼方さんは遥ちゃんのためになることが、一番やりたいことだから」

「詩音さん……………」

「ちゃんと話してあげて」

「はい」

とりあえず二人の事は何とかなりそうかな？

「それにしても詩音さん、お姉ちゃんのためなら頑張れますね」

「いや、恋人だし……………」

「いいなくお姉ちゃん、素敵な恋人がいて、あれ？でも結婚したら、詩音さんがお兄ちゃんに……………詩音さん！」

「な、何？」

「早く結婚してください」

「何でそうなるの!？」

「お姉ちゃんとは結婚したくないんですか!!」

「俺はまだ16だよ」

「なら、18になったら………いえ、もう私たちの家に住んでください!!」

何か暴走している遙ちゃん。俺はそんな遙ちゃんを落ち着かせるのに苦労するのであった。

次の日

「詩音くんへありがとうねへ遙ちゃんと話してお弁当受け取ってもらったよ」

朝の登校時に彼方さんからそんな話が出た。本当に良かった

「それでねへ遙ちゃんが言ってたんだけど、詩音くんへうちに住むの？」

「何でそんな話になるんだよ………と言うか遙ちゃんは伝えなくていいことを

………」

「私はいつでもいいよお母さんとお父さんにも紹介を………」

「彼方さん、少し話し合いますよ」

何とか説得したけど、生徒会室では

「同棲するって聞いたけど………」

「学生でそういうことはいけないかと」

響と三船さんにそんなことを言われるのであった。

1 1 看病

ある日の事、家でのおんぴりと過ごしていると、遙ちゃんから電話がかかってきた。

「どうかしたの？」

『あつ、お兄ちゃん。今大丈夫ですか？』

いや、そのお兄ちゃん呼びはやめてほしいのだけど……………

この間の一件で何故かそう呼ばれることになった。何と言うか、それが原因で勘違いされたりしているのだけど……………

「それで何か用？」

『実はお姉ちゃんが風邪を引いて……………看病お願いできませんか？』

いや、何だよ……………

「俺じゃないとダメなの？と言うか遙ちゃんが……………」

『すみません。私は外せない用事があって、お願いします』

断る理由もないし、行くでしょう。

彼方さんの家に行くくと、遙ちゃんが出迎えてくれた。

「待つてました。お願いします。お兄ちゃん」

「その呼び方はやめろ」

「良いじゃないですか。将来的にはそうなるんですから」

将来的には……………か。

遙ちゃんの案内された部屋に行くくと、彼方さんが寝ていた。

寝ているのは良いとして、色々とはだけてるんだけど……………

「それじゃお願いしますね」

遙ちゃんはそう言つて出掛けていった。さて看病しろと言われても、何をすれば良い

のやら……………

「ん、んんくあれく遙ちゃんが詩音くんになつてるく何でく？」

「遙ちゃんに頼まれたんですよ。ほら、寝ていてください」

「んくでもお客さんにお茶をく」

「いいですから、寝ていてください」

風邪を引いてるのに、変に気を使って……………

俺は濡らしたタオルを彼方さんの額にのせた。

「冷たい」

「遙ちゃんが帰ってくるまで、ここにいますから何かあったら言ってください」

俺はベッドにもたれかかり、持ってきた本を読み始める。すると彼方さんは……………

「詩音くん」

「何ですか？」

「背中拭いて」

何をとんでもないことを言い出すんだよ。この人は……………

俺は彼方さんの方を見ると、すでにパジャマの上を脱いで、背中を見せていた。

「あの……………」

「早く」

……は覚悟をして、俺は彼方さんの背中を拭いた。あまり背中を見ないように、目線を下にしてだ。

「気持ち」

「ここ、これぐらいでいいですか？」

「前も」

「前は自分で拭いて下さい」

「えへへ冗談だよ」

お願いだからそう言う冗談はやめてほしい。

彼方さんが体を拭き終え、着替えも済ました後は、他愛のない話をしていた。

気がつくとき彼方さんは眠っていた。

「彼方さん、お休み」

俺はそっとキスをし、彼方さんの側で眠りにつくのであった。

数日後

「けほっ、けほっ」

「移しちゃったね〜今日は私が看病するね〜」

まさか移るとは思ってたなかった。まあ移った理由は分かっているけど……………

「ダメだよ〜風邪引いてる人にキスしちゃ〜」

バレてたのか……………

1 2 バレンタイン

バレンタイン当日

お昼休みに彼方さんとお弁当を食べていると、彼方さんがあるものを渡してきた。

「どうぞ〜」

「これは？」

綺麗な包装紙に包まれているけど、何なんだろう？

「今日はバレンタインだから〜」

そういえばバレンタインだっけ？特に気にしてなかったから、言われるまでは分からなかった。

「早速食べてみて〜」

彼方さんに言われるまま、包装紙を開けてチョコを見るとトリュフチョコが入っていた。

「美味しそう……………だけど」

「だけど〜？」

てつきりハート型だと思っていた。まあ、気にしないようにするか

俺は1つ食べると……………

「美味しい」

「えへへ〜ありがとう〜もう1つどうぞ」

彼方さんにあ〜んしてもらい、もう1つ食べる

「美味しいですよ。彼方さん」

「ほらほら〜あ〜ん」

またあ〜んしてくれる彼方さん。これもしかして止めないと無くなるまで続くのかな？

「えっと、彼方さん。後はゆっくり食べるんで……………」

「そう〜?でも私は詩音くんの美味しいそうに食べてるところがみたいから〜私が満足するまで〜」

そう言いながら更に食べさせてくる彼方さん。ここは我慢しないとイケないのかな

結局最後まで食べさせてもらったけど、ちょっと苦しい。

「ぐっ、ぐっ 馳走さまです」

「お粗末様です。あつ、そうだ〜」

まだあるのかと身構えると、彼方さんが突然キスをしてきた

唇を離すと彼方さんは頬を染めながら笑顔で……………

「とびつきり甘いチョコだったけどく美味しかった〜?」

「……………とても美味しかったです」

不意打ちは止めてください。彼方さん。

放課後になり、生徒会に寄ると、何故か響が項垂れていた。三船さんに聞くと

……………

「彼女からまだチョコを貰ってないみたいです」

「は、はあ」

まだ貰えてないのはおかしい気がするけど、何か考えてるのかな?

「ああそれとどうぞ」

三船さんから板チョコを貰う俺。まさか三船さんから貰うとは……………

「日頃のお礼ですので」

なんと言うかこんな日でも通常運転だな。三船さんは……………

夜、彼方さんの家に招かれ、夕食をご馳走してもらうことになり、待っている中、遙ちゃんからチョコを貰った。

「お姉ちゃんには劣りますけど、どうですか？」

「美味しいけど……………」

彼方さんの最後のあれが凄かった……………

「どうかしたんですか？もしかしてお姉ちゃんのチョコが凄く美味しかったですか？まあ、大好きな人のチョコは他のより数倍美味しいですからね」

「そ、そうだけ……………」

流石に言えないよな。最後のあれは……………

「私もお姉ちゃんから貰ったけど、美味しかったです。これはお返しも考えないとダメですね」

「そういえばお返しか……………」

クッキーとかマシユマロとかの方がいいんだっけ？やっぱり手作りの方がいいかな？

「詩音さん、お返しはお姉ちゃんがしてほしいことの方がいいですよ。そっちの方がお姉ちゃんも喜びますので」

「わ、分かったよ」

彼方さんがしてほしいことか……………何なんだろう……………

13 ホワイトデー

先月のバレンタイン、今日はホワイトデー……ちゃんとお返しをしないといけないと
考えていたけど……………

「すう〜」

彼方さんの家で彼方さんに抱き枕にされていた。

何でこんなことになっているかと言うと、彼方さんにプレゼントを渡してきたら、何
故か部屋に連れられ、そのまま抱き枕に……………

「どうしよう……………」

このまま過ごすのも悪くはないけど……………プレゼントを渡さないと……………でも前に
聞いた遙ちゃんの話の話を思い出した。彼方さんがしてもらって嬉しいことをするのがい
いと言うことをだ。

それがこの抱き枕になることなのか……………

「いや、違うか……………彼方さん、起きてください」

彼方さんを起こすと、彼方さんは眠い目を擦りながら……………

「なに〜?」

「これ、お返しです」

お返しのマカロンを渡した。遙ちゃんいわくお返しはマカロンの方がいいと言われているけれど、彼方さんの好きなものなのかな？

「ありがとう〜後で食べるね〜それじゃ〜」

また抱きつこうとして来た彼方さん。僕はそれを止め……………

「あの、抱き枕になるのがしてもらって嬉しいことなんですか？」

「違うよ〜ただ詩音くんとイチヤイチャしたいだけでもエツチなのはダメだよ〜」

イチヤイチャしたいだけ……………

「さあ〜イチヤイチャしよう〜」

彼方さんは両手を広げていた。僕はそんな彼方さんを抱き締めた。

「詩音くんにぎゅとされるの嬉しいな〜暖かくつて〜」

「寝ないでくださいね……………」

僕は彼方さんの髪を優しく触れていく。柔らかい髪に仄かに香るシャンプーの匂い

……………更に耳を愛撫した。

「んん、エツチなのはダメだよ〜」

「耳、触ってるだけですよ」

「触り方がえつちだよ〜」

ちよつと怒つた顔をしているけど、気にせず耳を触つた

「んん、ダメ……」

耳を触り終わると、今度はキスをした。最初は軽く……何度もしていき、長めにキスをしていく。

「彼方さん……」

「もつと……キスして……それに……ぎゅとして……」

それからはキスをしたり、抱き締めあつたりと、甘い時間を過ごすのであつた。

気がつくとお互い眠つていた。彼方さんの方を見ると、服が乱れていたけど……
してないよな

「んんあれ？服がく詩音くん？」

「してないです!!」

「知つてるよくただ寝ぼけて乱れちゃつたみたいだね」

それならいいけど……そろそろ帰らないといけない時間だと思い、帰ろうとする

と……………

「ねえ、今日は遙ちゃん、お泊まりだから一緒にいてよ」

「でも……………」

「ねえよ」

上目遣いでそんな風に頼まれると、断れないですよ……………彼方さん。

それから夕食を、ご馳走してもらおうと、何故か彼方さんに海パンを渡されて、これでお風呂に入ると頼まれた。

湯船に入っていると……………

「湯加減どう？」

水着姿の彼方さんがお風呂に入ってきた。

「か、彼方さん……………!?!」

「詩音くんには裸の方が良かった？でも今日はダメだから水着よ」

あの水着の方がかなりいいですけど……………彼方さんは湯船に入り、僕にもたれ掛かった。

「えへへ」

「あの……彼方さん」

「詩音くんとお風呂」

凄く嬉しそうにしている。これはこれで良かったのかもしれない。

それからお互いの体を洗いっこし、彼方さんの部屋でまたキスをしていく。

「彼方さん……正直言う……」

「……もういいかな？」

彼方さんはある場所を見た。僕も見てみると時計が0時を過ぎていた。

「ホワイトデー、終わっちゃったね」

「彼方さん……」

最終話 想いは彼方へ

初めて会ったとき、貴方が寝ている私と出会ったんだよね。それからずっと私という時間を作ってくれた。だからこんな日を迎えるのは、夢みたいだよ

「おはよ〜」

「彼方さん、もうお昼です」

「そうだった〜」

まだ寝ぼけてるのかな？でもこのやり取りは好きだ。

いつもの日常のように思える。

お昼を食べ終え、いつもなら彼方さんがお昼寝をするのかと思っていたけど……………

「ねえ〜」

「どうしたんです？彼方さん」

「私たちの関係はずっと続くのかな？」

何でいきなりそんなことを聞くのかと思った。もしかして何かあったのかな？

「俺が彼方さんの好きでいる限りは……………続きますよ」

「本当に」

「本当ですよ。彼方さんは好きで……………居続けられますか？」

「私は、詩音くんと同じだよ」

彼方さんはそう言いながら俺にキスをしてきた。彼方さんは唇を離すと微笑み

……………

「詩音くん、大好き」

「俺も好きですよ」

そんないつも通りの日々を過ごして……………

「彼方さん……………起きてください」

「んゝついたのゝ」

今日は彼方さんとピクニックに来ていた。最初はピクニックでいいのかなと思って
いたけど……彼方さんからの希望だった

「今日は絶好調の日じゃなかったんですか？」

「そうなんだけど、朝早く起きてくお弁当作ったから」

眠いということですか……彼方さんらしい

「でも楽しみだね、ピクニック」

「そうですね」

「それに、詩音くんの卒業祝いだもんね」

「ありがとうございます」

彼方さんと出会ってから、数年が経ち、俺も虹ヶ咲を卒業した。

そのお祝いをかねてのピクニック。でも俺としては……

俺はポケットの中にあるものを確認した。彼方さんが卒業してからずっとバイトを
頑張っていたから……

数日前

「なるほど……ついにですか」

「うん、ついにだよ」

遙ちゃんに例の件について話していた。遙ちゃん的にはやつとですネと言われた。

「それで今回は何をしに？」

「その……………どんなのがいいのか女の子の目線で……………」

俺がそう告げると、遙ちゃんはため息をついた。

「詩音さんが選ぶものならきつとお姉ちゃんは喜びますよ……………そんなことよりも渡し方を考えましょう!!あれですか?夜景の見えるレストランですか?」

「それを考えたけど……………彼方さん……………ピクニックがしたいって」

「お姉ちゃんらしいですね……………」

「まあ渡し方は……………」

目的地に着き、彼方さんのお弁当を食べていた。この感じ……………懐かしい

「懐かしいね〜」

「そうですね……………寝ている彼方さんを起こして……………」

「お弁当食べて〜お昼寝〜」

彼方さんは俺の膝に頭をのせてきた。

「ずっとこの時間が続いたらいいな」

「いいんじゃないかって、続けていきましよう……彼方さん……」

「……」

「彼方さん？」

「くう」

寝ている……彼方さんらしいけど、チャンスだよな。

俺はポケットからケースをとり出し、彼方さんの指に指輪をはめた。そして……
「彼方さん、結婚してください。幸せにします」

耳元でそう囁くと……彼方さんは……

「結婚!？」

直ぐに起き上がり、はめた指輪をみた。そして涙を流した。

「詩音くん……」

「ずっと待たせていてごめんなさい。でもこれからは一緒にいてください」

「……はい、不束者ですが、幸せにしてください」

笑顔で答える彼方さんであった。